

上野水香 バレエを語る

～諦めない心 芸術の高みを目指して～

東京バレエ団ゲストプリンシパル 上野 水香
プレジール・レター株式会社社長 岩永 智博

1、上野水香、トップダンサーへの道程

1) バレエとの出会い、初めたきっかけ

🌀ピラミッド構造の頂点に

岩永 上野水香さんはいま東京バレエ団のゲストプリンシパルとして活躍しています。東京バレエ団は非常にたくさんのレパートリーを上演していますが、彼女は「白鳥の湖」などの古典の作品だけでなく、現代作品など、ほぼすべてで主役を踊っています。バレエ団の中でプリンシパルという階級は頂点で、多くの重責を担う存在です。ここでは、水香さんがトップダンサーになるまでの道程をうかがってまいります。



岩永 この写真はいつごろのものですか？

上野 幼稚園の年長さんの5歳のころですね。

岩永 バレエを始めたのはいつですか？

上野 この舞台を見た近所の方が私の母に、「水香ちゃんはずい舞台映えするからバレエをやったらどうかしら」と言ったのがきっかけでした。

岩永 ご自身からやりたいというわけではなかった？

上野 全然。この話も私は覚えていませんし。

🌀「上野水香」の誕生はご近所の方がきっかけ

岩永 そのご近所の方がいなければ上野水香は誕生していなかった？

上野 そうですね。もともとピアノを習っていたから、母はピアニストや歌手なんかになってほしかったようで、バレエは全く思い浮かべなかったみたいです。

岩永 左の写真はお父さんと妹さん？ 右が水香さんですか？



上野 はいそうです。妹は3歳下です。

岩永 あまり身長差を感じませんか。いまは身長が高くてスタイルが美しく輝いていらっしゃいますが。

上野 このころは小柄で全然伸びなくて、妹にも追い越されて悩んでいました。いまも妹のほうが大きくて、両親も大きいので4人集まると林みたいです。右の写真は中学2年の時ですね。

岩永 まだ小さくて幼い感じですが、手足はとても長いんですね。このころはバレエ1本でしたか？ バレエを嫌いになったことはありましたか？



🌀踊るとみんなが近寄ってくる！

上野 大好きでした。今でもそうですけど、踊っていると嫌なことも全部忘れて没頭できました。子どものころはとてもシャイで、お友だちとも馴染めなくていつも一人でいたんですが、踊り始めるとみんな

なが近寄ってきてくれたのが、気持ちがよくて。私が持っている踊りの力がみんなを動かしていると感じられて、本当にバレエが合っていたんだと思います。

岩永 これはプロの舞台に出演した時ですね。

上野 牧阿佐美バレエ団の公演に出演した時です。これは小柄な大人がやる役なのですが、踊れる子どもは牧先生に選ばれて踊れるという、ちょっとステータスがある役でした。中学1年か2年の時ですが、周りの大人たちから「可愛い、可愛い」ってお声がけいただいたのを覚えていて。恥ずかしくて最初はちゃんと踊れませんでした。



2) 世界の登竜門へのチャレンジ

🌀ローザンヌは憧れの特別な場所

岩永 そんな水香さんが大きな転機を迎えるのがローザンヌ国際バレエコンクールの挑戦でしたね。やっぱりローザンヌというのは特別ですか？



上野 世界中でバレエを習うジュニアにとって、本当に特別な場所だと思います。あそこであまうまういけばプロへの道が開かれる登竜門です。私が子どもだったころは、奨学金をもらえるコンクールはこれしかなくて、目指す一番の存在でした。決戦の様様を毎年テレビで観て憧れていて、15歳になったら絶対行きたいなと思っていました。そして先生に薦められて15歳2か月で受験しました。

岩永 出てくる人はみんなかなりのレベルでしょうが、萎縮しませんでしたか？

上野 実は、子どものころからコンクールが苦手でした。みんなが「自分が一番」と思っているから怖くて。舞台の袖で練習中にぶつかってにらまれたりすると、もう萎縮しちゃって。発表会はこのびのびと踊れるのが好きでしたが、コンクールは好きじゃなかったんです。でもローザンヌは割と和気あいあいとしていましたね。予選の段階からみんなと一緒に稽古したりするので、「がんばろうね」と励まし合うような温かい感じがありました。

🌀将来性を見込まれて賞をいただいた

岩永 初挑戦のこの時に「これはいけるかな」という感覚はありましたか？



上野 当時は成長痛で膝を痛めていて、行くか行かないか迷うくらいのコンディションでしたが、憧れの場所なので「とりあえず行ってダメなら来年受けよう」と思って行きました。賞を取ろうとも思っていなかったのですが、行ってみたらとても楽しかったんです。ローザンヌは、日本のコンクールのような1位、2位、3位みたいな世界じゃなく、奨学金を出して留学させ、いいダンサーになってもらいたいという願いが込められたコンクールなんです。その時点での順位よりも、将来性を見ている感じ。だから最高の状態じゃなかったけど賞をいただけたんだと思っています。

岩永 ローザンヌは日本でも有名になり、日本人が受賞すると新聞等でも大きく報じられますが、水香さんがおっしゃったようにローザンヌは奨学金を出して、海外で高等教育を受けられる機会を与えるものです。賞を取ったからといってプロとしての活動が確約されたわけではないんですね。なので過去に受賞した日本人も何十人といいますが、そのすべてプロのダンサーにはなってはいませんよね？

上野 そうです。私と一緒に受賞した方もいましたが、「いまどうしているんだろう？」。プロにはなっていませんね。

3) 開かれた夢の世界

🌀モナコでさらに奨学金を受けて2年間の留學生活

岩永 受賞した水香さんが留学先として選んだのはどちらだったんですか？

上野 当時習っていた先生から薦められたモナコのプリンセス・グレース・クラシック・ダンス・アカ

デミーを選びました。

岩永 学校生活での共通言語は何語でしたか？

上野 モナコの公用語はフランス語ですが、レッスンや寮の中では英語でした。英語は中学の時に習っていたので、改めて習ったりはしませんでした。外に出るとフランス語を使わなくては行けないので、モナコ在住の日本人の方に基礎から教えていただきました。

岩永 これは寮での写真ですね。本当にいろんな国籍の方がいますね。部屋は何人部屋でしたか？

上野 4人部屋を3人で使い、しばらくして2人になりました。ローザンヌの奨学金は1年間なのですが、先生から「バレエ学校から奨学金を出すからあと1年残ってほしい」と言われて残り、2年間の留学後に卒業して日本に帰りました。



岩永 ローザンヌと現地のダブルで奨学金をもらった人は他にいないですよ？

上野 そうですね。ほとんどの方が実費で来ていました。

🌀寝ている時にも背が伸びたのを実感

岩永 若いうちからいろんな人に才能を見出されていたということですね。世界で活躍する水香さんの素地ができたのがモナコだったということです。これは留学時代の写真ですが大分大きくなられていますね。

上野 留学している間に10cmくらい伸びて165cmくらいになりました。帰ってからも20歳までにまた5cm伸びて、いま170cmくらいです。この時には寝ている間に「ビューン」って身長が伸びる感覚があって。「いま絶対背伸びた」って思いましたもの。

岩永 モナコ時代にプロになることを意識していましたか？

上野 ローザンヌで賞をいただいた時に、「将来性があると評価してもらった」と15歳の自分なりに思い、プロとしてやっていくことを目標にするようになりました。

2、直面した困難、挫折、高い壁の克服

🌀足のラインへのダメ出しに奮起

岩永 さて、次のテーマですが、水香さんがこれまでに直面した困難や高い壁、そしてそれをどのように克服されたのかを事前にうかがい、3つ挙げていただきました。まず1つ目がモナコ留学時代。この時の壁というのは、どのようなものだったのですか？ 成長してバランスがうまく取れないとか？

上野 モナコに行ってすぐに「日本人は膝や爪先がちゃんと伸びていないし、きちんと立てない」「きれいな足でいるということへの意識が足りない」と言われました。すごくショックだったのですが、確かに常にきれいな足でいることへの意識はしていなかったとも思いました。バレエを習っている人はみんなそうしていますが、足をきれいにさせるにはアンデオールといって、常に足を開いた「外足」でいなければなりません。これはバレエの一番の基礎とされています。トゥシューズは爪先で立つのですが、足が横を向くと見えるのですが、前を向くとかかが見えないので、爪先で立っているのかベタ足なのかが分かりません。つまり足を開かないときれいなラインが見えないのです。でもどうすればうまく開けるのが教わってもなかなか分からず、思うようなラインが出なくてすごく悩みました。



岩永 その時はかなり高いレベルだったと思われませんが、それでも直されることは多かったのですね。
上野 フランスの伝説的なバレリーナであるシルヴィ・ギエムの足のラインがあまりにも美しく、憧



れていた私は小学校の授業中に彼女の足の絵を描いていたほどでした。だから、言われたことをやればギエムのような足になるかもしれないと思い、彼女の映像や写真を見ながら、日曜日にもレッスン場の鏡を見ながら頑張りました。でもギエムへの憧れや、ノウハウを教わるだけでは手が届かなかったでしょう。頑張りが続けられる力がないととどり着かなかったと思います。2年間頑張って、「すごくきれいな足に変わった」と先生に言ってもらえた時はすごくうれしかったです。

岩永 その時は高い壁でも、諦めないで日々の修練を重ねたからこそ、そこまで到達したということですね。これはモナコ時代の恩師、マリカ・ベゾブラゾワ先生ですね。たくさんの生徒を長年指導されたのですが、その中でも水香さんは特別だったのでしょうか。

上野 とても可愛がっていただきました。寮生とふざけていたら相手のほうだけが叱られたりして。ごめんなさいといつも思っていました。

岩永 そして留学後にいよいよプロデビュー。最初は牧阿佐美バレエ団に入団しましたが、そこで2つ目の壁と対峙することになります。たくさんの修練と勉強を重ねて入団しても、すぐに同バレエ団では役がつかなかったそうですね。どんな苦労がありましたか？

🌀その他大勢で叱られては泣いてばかり

上野 すぐにソリストの役をいただいたのですが、その後役がつかなくなり、3、4年間はその他の群舞ばかりでした。子どものころから1人で踊る役に慣れていたので、群舞でみんなとうまく合わせられなくて、怒られては泣いてばかりでした。どうしたらもっと踊れるようになるんだろうと悩んでいた時期がありましたが、ある時、フランスの偉大な振付家、ローラン・プティさんがオーディションをするために来日し、私のことをすぐに目を止めてくださったんです。「あの娘にトウシューズを履かせてみる」って言って、主役のダンサーと同じことを私にやらせてくださいました。びっくりしたけどうれしくて、これでもかと自分を見せたら終わった後に呼ばれて、その場で「主役をやらせる」と言ってくださったんです。結局、その時は主役はできなかったのですが、主役の人が怪我や病気で出演できなくなった場合に備えて振りを学んでおくアンダースタディをさせてもらいました。それ以来、プティさんが来日されるたびに、主要な役や私のための作品を提供してくれて、それ以外の作品でも主役の機会も回ってくるようになりました。



🌀試練を与えられて幅が広がった



岩永 水香さんは主役をやるために生まれてきたような人ですが、群舞など主役以外の役も経験したことが、かえって良かったのかも知れませんね。

上野 みんながどれだけ大変な思いをし、一人一人が頑張ってこそその大舞台であることを実体験として学ぶことができました。バレエをつくり上げるには、想像では分からないたくさんのことがあることを経験できたことは、本当に大きな成果でした。

🌀プティのおかげで水を得た魚のように

岩永 昨今はコンクールもたくさんありますが、コンクールで踊る課題曲というのは大体主役の踊りです。子どもたちはそれを一生懸命練習するのですが、プロの世界では群舞も含め、様々な役柄を演じることが求められます。そこで初めて実際のバレエの世界とのギャップを感じる人も少なからずいます。水香さんの場合は試練を与えられたことで、ダンサーとしての幅が広がったのでしょうか。そして、水香さんを引き上げてくれたプティさんとあなたの相性はとても良かったのだと思います。水香さんが踊るプティ作品を観ると、プティの精神が体に宿っているような気がします。

上野 彼のおかげで水を得た魚のようになりました。生粋のパリジャンである彼の振り付けは、パリの

エスプリを感じられて、とてもお洒落なんです。それを表現できるのがすごく楽しくて。

岩永 フランス人でないとエスプリは分からないから、日本人はプティの作品は踊れないと言われたこともあったようです。でも水香さんはフランス語圏のモナコで、パリ・オペラ座のメソッドに近い教育も受けていたことも大きかったんでしょうね。

上野 基礎の部分で分かるところがありました。

岩永 そして3つ目の壁と言いますか、転機となったのがベジャール、そして彼の振付作品である「ボレロ」との出会いですね。水香さんは2004年に東京バレエ団に移籍されましたが、当時、国内のバレエ団の間での移籍というのはほとんどなく、バレエ界で注目を集めましたよね？

上野 はい、すごく大きなことのような感じでしたね。

🌀 好奇の目で見られているようで怖かった

岩永 東京バレエ団へはプリンシパルとして移籍し、最初の舞台がいきなり海外公演。フィレンツェ歌劇場で「ドン・キホーテ」のキトリを踊られました。移籍していきなり重責を担わなくてはいけないことへのプレッシャーはありましたか？

上野 周りの目が怖かったです。「どんな踊りなんだろう」という好奇の目で見られているようで、毎日が緊張の連続でした。みなさんは入団してから徐々に階級が上がっていくのに、私は外からやってきてボンと海外ツアーに出て、主役を踊りましたから、その当時の団員の中には複雑な気持ちを持たれた方もいたでしょうね。入団して1か月後くらいで海外公演だったので、団員の顔もあまり分からず、成田空港で集合した時に向こうから「おはようございます」って声をかけられ慌てたりして。

🌀 ベジャール作品を演じられるのは東京バレエ団だけ

岩永 東京バレエ団の特徴として、現代バレエの巨匠といわれた振付家のモーリス・ベジャールさんの作品が、日本では東京バレエ団しか演じられないことも大きいですね。そして水香さんはベジャールの代表作である「ボレロ」を踊ることになりました。水香さんが憧れていたシルヴィ・ギエムさんも、東京バレエ団で長らく「ボレロ」を踊っていましたね。

上野 もうずっと追いかけていて、日本に来た時は全部観ていました。チケット発売日に電話してやっと取って、すごい上のほうで観たことも覚えています。

岩永 東京バレエ団は海外公演が非常に多く、すでに775回を数え、ちょうど今もオーストラリアのメルボルンで公演中です。これはパリ・オペラ座ガルニエ宮公演の時のスナップですが、海外の劇場の環境は日本と違いますか？

上野 はい、違いますね。例えば、パリ・オペラ座（ガルニエ宮）では劇場の中にスタジオがいくつもあって、みなさんは劇場で働いている感覚ですね。東京バレエ団の場合だと、カンパニーは目黒、劇場は上野という様に場所が違います。海外のみなさんは、劇場は家みたいなものだとよくおっしゃっています。

岩永 海外のバレエ団はそれぞれ歌劇場に所属していますが、日本ではそういうケースはまずないですからね。さて、水香さんはベジャールから「ボレロ」を直接指導してもらったとのことですが、その時点で既にご高齢だったベジャールさん本人から直接指導を受けられるとは、強運の持ち主ですね。

上野 すごくラッキーだったと思います。

岩永 いま東京バレエ団の中で「ボレロ」の中心で踊るメロディという役を踊ることが許されているのは水香さんと男性1人だけですが、世界中でもこの役を踊れるのは20人もいないでしょうね。彼女が世界的なダンサーであることの証のひとつといえるでしょう。

上野 ベジャールさんから「ボレロ」の指導を直接受けた人の中で、まだ踊っているのは私くらいだと思います。

岩永 どんなことを指導されましたか？



🌀「ボレロを踊る時もバレエの基礎を大事に！」

上野 ひとつひとつの動きについてですね。ベジャールさん独特の踊りの形があるので、それを直接伝えていただきました。振りを追うだけじゃなくて、形の意図をきちんと見せてほしいと。さらに「自分の作品はすべてクラシックバレエが基になっているから、「白鳥の湖」などを踊るのと同じように、バレエの基礎を大事にしながらこの動きをしてほしい」とおっしゃいました。最後に「とてもいいボレロになるだろう」と言っていたのが忘れられません。



岩永 「ボレロ」のメロディの周りで踊るリズムという群舞は、黒タイツで上半身裸の男性たち。本当にシンプルなんですけど、この作品を観てしまうと、「ボレロ」という音楽はこの作品のために作られたんじゃないかと錯覚してしまうほどです。水香さんは「ボレロ」以外にもベジャール作品をたくさん踊られていますね？

上野 ベジャール作品はやはり特別です。魂が宿っていて、人間のコアなところを追究している作品が多いんです。だから表

面的ではなく、生身の人間のあり方や魂とはこういうものだということを具現化しているような、深い味わいがあるんです。

岩永 うーん、さすがですね。言葉に重みがあります。

上野 そうですか（笑）。

3、世界と対峙する心の持ち様

🌀踊りという言語でちゃんと繋がっている

岩永 さて、次のテーマに移りましょう。水香さんはいろんな国籍のダンサーと踊ってきました。これはマルセロ・ゴメスさんとのリハーサルの様子ですが、国籍やアイデンティティの違いを感じることはありますか？

上野 海外の方のほうが遠慮なくはっきりものを言うので、ちょっと圧倒されることもありますけど、慣れてくるとそのほうがやりやすかったりします。それにバレエは言葉を交わす仕事ではなく、踊ることが共通の仕事ですから、踊りという言語でちゃんと繋がっています。例えば打ち合わせなどなくても、音がかかって2人で踊り出せば仕事が出来ちゃいます。不思議なんですけどね。



岩永 舞踊言語を通じてつながるということですね。

上野 踊って2人の化学反応をみながら「こうしよう、ああしよう」って調整していくんです。言葉や文化が違うことのギャップはそれほど感じません。

岩永 バレエの基礎は世界基準があり、しかも言葉がない世界ですから、どこの国の人が踊ろうがみんな同じですものね。その代わり、世界基準があるからこそ厳しい目で見られますけどね。そんな世界において、日本人だからこそその違いを感じることはありますか？

🌀「伸び伸び」と「繊細さ」のバランスが私の存在価値

上野 日本人は細かいことを気にするなど繊細な心の持ち主で、踊りにもそういう個性が出てきます。私は日本の中では割と大味でダイナミックと言われますが、それでも世界の方に比べればぜんぜん繊細だったりするんです。だから伸び伸び踊る部分と繊細な部分のバランスが保たれた時に、私が世界の中



で立っていく意味があるのではないかと、長年やってきてそう思うようになってきました。

岩永 ダンサーだけでなく、世界の名振付家からも愛されてきましたね。左の写真のジョン・ノイマイヤーさんやジャン＝クリストフ・マイヨーさんなど。振付家による違いというのはありますか？

🌀自分なりのスペシャルがあれば・・・

上野 振付の仕方は国々ではなく個人差があります。例えばプティさんは、まるで天から降ってきたように次々と振りを出してきますが、ノイマイヤーさんはすごくじっくり考えられて、ステップをひとつ編み出します。

岩永 水香さんはバレエというグローバルな環境の中でも常に変わらず、自分らしくしておられるのですね？

上野 あまり器用じゃないので私自身は扱い難いかもかもしれませんが…。自分を確立し、自分なりのスペシャルがあれば、国境や文化の違いを乗り越えられると思います。

4、誰もがができること、自分にしかできないこと

🌀緊張感があつたほうがピリッとする

岩永 では、最後のテーマにお話を進めてまいりましょう。水香さんが如何に特別かというお話をしてきましたが、みなさんも水香さんと同じようにお感じになり、また今後の生活のヒントになれるようなお話もうかがってまいりたいと思います。みなさんも緊張されることはあると思いますが、水香さんは緊張されることはないのでしょうか？

上野 緊張はいつもしていますが、みなさんからは「緊張してないみたい」とよく言われます。出る前は緊張しますが、幕が上がって音が出ると、緊張していることすら忘れるくらい集中しちゃいます。

岩永 緊張感を持って臨むほうがポテンシャルを上げられるということですか？

上野 緊張感は絶対あつたほうがピリッとしますし、みなさんも力を出せると思います。足りない時は少し緩んだりしますよね。

🌀守り神のカメの縫いぐるみは3代目



岩永 これは楽屋の様子ですが、実は水香さんには守り神がいて、幼いころからどこへでも持ち歩いているんですよ。

上野 はい、カメの縫いぐるみです。この子は3代目で、専用の座布団もあります。スタッフさんも面白がって、カメのために「ボレロ」の赤い円卓の縮小版を作ってくださいました。本物と同じ素材で組み立ててあるそうで、このカメといつも一緒にいることが自分にとってのジンクスみたいなものですね。

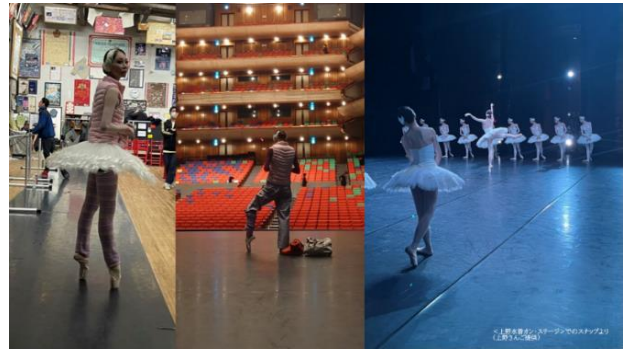
岩永 次頁の写真は「白鳥の湖」本番前のウォーミングアップと本番時の様子ですが、自分にしかできないものを意識することはありますか？

🌀何も考えず作品に身を委ねたら受けた

上野 自分にしかできないものというのは、最近になって何となくつかめてきたような気がします。特に「ボレロ」はそう思います。バレエは本当に時間がかかるもので、4、5歳のころから始めて、大人になってようやくプロとして通用するレベルになります。プロになってからも、本当の意味でのアーティ

ストというところまで行き着くにも、またその人ならではの踊りができるまでにも相当な時間がかかります。私もいろいろ悩んだり、試行錯誤を繰り返したりしましたが、ある時、もう何も考えないで作品に飛び込み、身を委ねるようとして踊った「ボレロ」がとても高い評価をいただけたのです。その時に「これが自分らしさなんだ」という答えが出たんだと思います。

岩永 そんな水香さんでもまだ踊ったことのない作品もたくさんありますから、バレエダンサーとしてのチャレンジというのは、これから先もずっと続きますね。



🦋 踊っている限りは挑戦し続けたい

上野 踊っている限りは挑戦し続けていかないと、同じことの繰り返しになってしまうので。

岩永 水香さんの進んだ後に道が出来て、水香さんが進む先には新しいバレエがある。そんな達観した踊りの域にいらっしゃるんですね。踊るために生まれてきて、踊りの神様に祝福されて今があると思います。みなさんも機会がありましたら、ぜひ上野水香さんの生の舞台を観ていただき、彼女のすごさに触れて感動していただきたいと思います。

【質疑応答】

- 疲れたら寝る。そしてドライブ、温泉、食べる
- 舞台に上がる前に十分なストレッチ
- 腕の羽ばたきは全部の関節を回しながら動かす
- 痛みが来るのは動きの欠点を教えてくれるサイン

Q 疲れた時のリラックス方法を教えてください。

A 身体がどうにも動かないほど心底疲れた時はまず寝ます。寝たら嫌なことも忘れるし疲れも取れる。そして出かける元気があったら好きなドライブですね。海を見にちょっと走らせて、温泉に入り、おいしいものを食べるとリフレッシュできます。

Q すてきな佇まいを保つヒントは何でしょうか？

A 佇まいを特に意識することはありません。舞台では人目にさらされ、スタジオには大きい鏡があるので、常にどう見えているのかを考え、感じながら体を動かしていきます。それが日常にも通じていると思います。

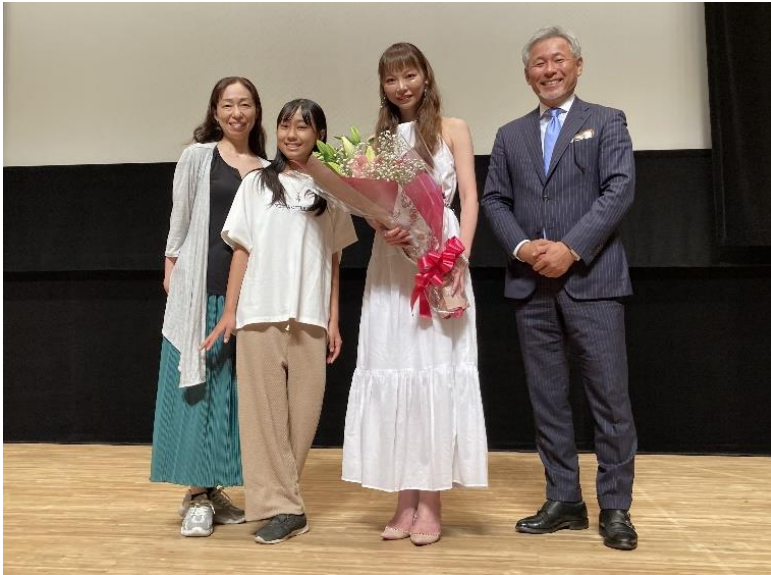
Q いつもルーティーンとして行っているストレッチや筋トレはありますか？

A インナーマッスルを鍛えるためのストレッチはいつもしています。私が舞台に上がる前に必ずやるのは、バーにつかまらないうで片足を極限まで上げること。耳のところまで普通に上がるのですが、手を使うと反対側まで行っちゃいます。舞台ではそこまで上げないので、その分余裕ができるんです。

Q 「白鳥の湖」を踊るので何かアドバイスを。

A 子どものころ、テレビで白鳥が飛んでいる映像を見たんですが、羽ばたいている羽の動きが伝説の名ダンサーのマイヤ・プリセツカヤさんと同じに見えたんです。すごいですよ。ぜひプリセツカヤさんの白鳥をご覧になってみてください。そしてどういうふうに鳥を表現できるかなと想像を膨らませ、羽ばたきの練習をしてみたらどうでしょう。それから、バレリーナが踊る白鳥の羽の動きは、実は上下動じゃなく回しているんです。肩、肘、手首、指の全部の関節を滑らかに回しながら動かすような感覚





上野さんに花束を贈呈した新井美恵子さん、麻央さん親子。右端は岩永さん。小学校2年の時からバレエを習っている麻央さんは「憧れの上野さんにお会いできて光栄」と感激していました。

定したりするんです。もっと良くなるために痛みが教えてくれているんだと思います。みなさんの場合も、痛みが来るのは筋肉のどこかに弱い部分があるせいでしょうから、そこを強化することで改善されるかもしれません。

なんです。羽ばたきがうまくできたらほかの子よりもうまくなるかもしれませんね。

Q 身体に張りや痛みを感じることはありますか？ そうなった時はどうしていますか？

A いつもどこかが痛いですが、痛いほうが自分の身体に目が向くのでいいですよ。どこも痛くないとコントロールしないで動かしちゃうので、かえって悪くなったりします。痛いところが出るというのは、踊り方や身体の動かし方に欠点があるからです。私

本講義録の中の写真のうち、会場写真以外はすべて上野さんから提供されたものです。

上野水香さんのプロフィール

神奈川県出身。5歳よりバレエを始める。ローザンヌ国際バレエコンクールでスカラシップ賞を受賞後、モナコのプリンセス・グレース・クラシック・ダンス・アカデミーに2年間留学。2004年、東京バレエ団にプリンシパルとして入団した。

『白鳥の湖』、『眠れる森の美女』、『ドン・キホーテ』などの古典全幕からベジャール、プティ、ノイマイヤー、フォーサイス、バランシンなどの現代作品までレパートリーは幅広く、これまでにベジャールの『ボレロ』を踊ることを許された唯一の日本人女性ダンサー。

東京バレエ団の海外公演ではパリ・オペラ座、ミラノ・スカラ座、ウィーン歌劇場をはじめ欧州の著名な歌劇場で主演し、高評を博した。また、海外の主要な歌劇場やガラ公演からも数多く招かれ、J. マルティネス、M. ガニオ、F. フォーゲル、R. ボッレ、D. ホールバーグなど、世界的なスターダンサーとの共演を重ねている。

岩永智博さんのプロフィール

公益財団法人日本舞台芸術振興会（NBS）で20年にわたり、営業部長、制作部長、販売部長等を歴任。世界の名門歌劇場のオペラ、バレエ、オーケストラの招聘、東京バレエ団運営に携わり、全国公演の公演プロモート等を統括する。2021年10月、プレジール・レター株式会社を設立。これまでの経験を活かして劇場・団体等の企画、営業、制作のマネジメントや、運営/助成のコンサルティングやサポートの他、イベント司会/講演を行い、舞台芸術を通じた感動体験の提供と浸透に尽力している。